

「35年ほど前、ここを舞台にして僕らの演劇サークルの芝居公演をしたんですよ。昨年11月、学生時代の思い出が刻まれた帯広市内の築50年の建物を改装し、ギャラリー「ギャラリー オリザ」と「ミニントカフェ」(大通南6)を開いた。建物は十勝の演劇をけん引し、文化情報を発信してきた「喫茶大通茶館」の跡。真さん(57)は帯広畜産大、怜子さん(55)は帯広大谷短大在学中、ともに帯畜大の演劇サークルに所属し、大通茶館に足しげく通った。卒業後に結婚し、帯広を離れてからも公演などがあると店を訪れ、交流を続けてきた。

ゆくゆくは怜子さんの実家がある帯広へのUターンを考

思い出の喫茶店跡にギャラリー・カフェ開店

おおくぼ しん せいこ
大久保 真さん、怜子さん



人と創作をつなぐ場所に

えていたところ、2015年開くことにした。12月に大通茶館が開店することを知り、心が決まった。真さんは勤めていた農業団体を早期退職し、思い出の場所で夫婦でギャラリー・カフェを

湿原で発達し、人の世界観に少なからず影響を及ぼしていると思う。湿原を撮影していると、人間の心象風景に触れているように感じる」と話し、芝居からフィールドを交え創作に携わってきた。

かつて個展を開いた経験をもとに、作品を展示する側の視点でギャラリーを造った。天井は高さ約3メートルを確保し、壁にびょうが打てるほか、明

Monday
ひと

るさなどを調節できる照明にもこだわった。展示の規模に応じて使えるように2室を設け、自由度も高めた。カフェは怜子さんが担当する。知人のパティシエらのアドバイスを受けながら、手作りスイーツやランチ、毎朝自家焙煎するコーヒーなど、多様な人が楽しめるようにメニューを工夫した。「集う人たちが心地よく過ごせる空間にしたい」と怜子さん。ギャラリーでは主に2週間ごとに写真や絵画、エコクラフトなど、さまざまな作品展を行っている。2人は「人と創作をつなぐ場所を自指していきたい」と話し、夫婦二人三脚で店づくりに奮闘している。(安倍友紀子)